

障害のある児童生徒が自立と社会参加するために必要な資質・能力を
育成するためのカリキュラム・マネジメントに関する研究
～障害種の異なる特別支援学校の実践から～

千葉県総合教育センター

特別支援教育部

指導主事 深澤 祐子

指導主事 鈴木 淳一

指導主事 三橋 徹

研究指導主事 鈴木 郁夫

1 主題設定の理由

社会構造や雇用環境が急速に変化し、予測困難な時代を生きる上で必要な資質・能力を、児童生徒一人一人が身に付けるためには、教育課程の改善を図ることが大変重要である。また、児童生徒の障害の状況や学習上、生活上の困難さを踏まえ、学びの連続性の視点から教科横断的に組織した教育課程の在り方を示す必要がある。

特別支援学校においては、重複障害のある児童生徒も多数在籍しており、多様な教育的ニーズに応じた指導支援の必要性がより強く求められている。

新学習指導要領では、障害のある児童生徒が自己のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立し社会参加するために必要な力を培うためには、一人一人の障害の状態等に応じたきめ細かな指導及び評価を、より一層充実させることが重要であると示されている。さらに、教育課程に基づき、組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことの必要性についても示されたところである。

これらのことを踏まえ、本研究では、特別支援学校で必要な資質・能力を育成するための教育課程の在り方について、カリキュラム・マネジメントの視点で研究を行う。調査研究は2年計画とし、初年度には県内（市立を含む）特別支援学校41校の教育課程の内容について分析し、現状と課題を明らかにした上で、カリキュラム・マネジメント充実のための具体的内容について検討を進める。

2 研究の目的

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、予測困難な新しい時代にたくましく生きる児童生徒に必要な資質・能力を的確に捉え、特別支援学校における教育課程の在り方をカリキュラム・マネジメントの視点で研究する。

3 研究計画

年度	研究内容
平成30年度 (1年次)	・ 県内特別支援学校の現状と課題の把握 ・ 研究の具体的な方向性の検討 ・ 各教科と自立活動の2つの視点から目標設定ができるシートの開発
平成31年度 (2年次)	・ 目標設定シート（仮称）を用いた個別の指導計画の作成 ・ 調査研究協力員所属校（7校）における授業実践

	・個別の指導計画の評価・改善を教育課程の評価・改善につなげる仕組みの検討及び提案
--	--

4 研究概要

(1) 調査研究協力員会議

ア 平成30年度

第1回調査研究協力員会議（平成30年 6月 1日）

第2回調査研究協力員会議（平成30年 9月11日）

第3回調査研究協力員会議（平成30年11月26日）

第4回調査研究協力員会議（平成31年 1月18日）

イ 平成31年度

調査研究協力員会議（年4回）の開催予定

(2) 研究内容

ア 平成30年度

(ア) 新学習指導要領の趣旨を踏まえ、障害のある児童生徒が自立と社会参加するために必要な資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの視点を検討する。

・カリキュラム・マネジメントの充実のために必要な三つの側面を中心に、特別支援学校において必要な視点について研究する。

(イ) 県内特別支援学校の教育課程の現状を把握する。

・学校教育目標と各学部目標、各課程目標とのつながり、教育課程の分類、年間指導計画等について現状を把握する。

(ウ) 2種類の目標設定シート（仮称）を開発する。

・各教科等の視点から目標設定ができるシート（以下、「セレクトシート」という）を開発する。

・新特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」に示された実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの「流れの例」を基に、経験の浅い教員も作成しやすい目標設定シート（以下、「フローシート」という）について検討する。

イ 平成31年度

(ア) 目標設定シート（仮称）を用いて、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業実践を行う。

・目標設定シート（仮称）を用いて、事例対象者の個別の指導計画を作成する。

・単元目標、本時の目標等、子供の目指す姿を学力の三つの観点で整理し、主体的・対話的で深い学びの実現を目指すことができる学習指導案の検討をする。

(イ) 個別の指導計画の評価・改善を教育課程の評価・改善につなげる仕組みについて検討をする。

・授業実践後の評価を基に、次年度の各単元の具体的な学習内容の見直し、

さらに年間指導計画の見直しから改善につなげる仕組みを提案する。

- (ウ) 目標設定シート並びに学習指導案等を県総合教育センターWebサイトへ掲載し、教職員への周知を図る。

5 研究組織

(1) 講師

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
総括研究員 吉川 知夫 氏

(2) 調査研究協力員

県教育庁教育振興部特別支援教育課	指導主事	吉田 正巳
県立千葉盲学校	教諭	東 あずさ
県立千葉聾学校	教諭	村山 昌也
県立仁戸名特別支援学校（病弱）	教諭	高橋 敬子
県立桜が丘特別支援学校（肢体不自由）	教諭	島森 邦夫
県立銚子特別支援学校（肢体不自由）	教諭	野口 克巳
県立野田特別支援学校（知的障害）	教諭	大川 木綿子
県立特別支援学校流山高等学園（知的障害）	教諭	佐藤 拓馬

6 今年度の取組

(1) 特別支援学校における適切な個別の指導計画作成の手続き

第1回調査研究協力員会議では、講師から、学習指導要領改訂の方向性や特別支援学校学習指導要領改訂の要点、特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメントについての講義を受け、今後の研究の具体的な方向性について考えた。

新学習指導要領において、各学校における「カリキュラム・マネジメント」を実現するための三つの側面が示され、各教科を学ぶ本質的意義を捉え直し、各教科等の視点から児童生徒の実態を捉える必要があると示された。さらに特別支援学校においては、これらに加えて「個別の指導計画の実施状況の評価と改善を、教育課程の評価と改善につなげていく」ことが大切であると示された。

講師からは、特別支援学校においてカリキュラム・マネジメントを展開していくためには、「個別の指導計画作成の手続きが適切かどうかを

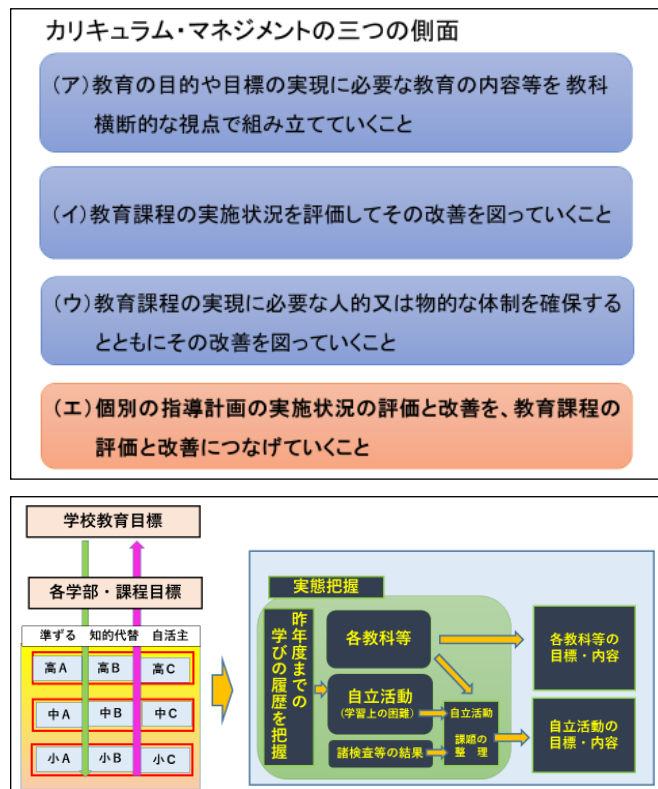


図1 個別の指導計画作成までの手続き

考えること」、具体的には「前年度までの学びの履歴をいかに次年度につなげていくのか、学習上や生活上の困難さを把握した上で自立活動と共に各教科等についても手続きの違いを理解し、目標設定を行っているのかを問い直すことが必要である。」という助言があった。（図1）

(2) 県内特別支援学校における個別の指導計画作成に関する現状と課題

第1回調査研究協力員会議での講義を受け、第2回調査研究協力員会議では、県内特別支援学校の教育課程の分類並びに個別の指導計画作成に関する現状を把握することから始めた。

ア 教育課程

特別支援学校では、児童生徒の障害の状態や発達段階に応じて複数の教育課程を編成し、指導を行っている。小学部や中学部、高等部における主な分類は以下の3つである。

課程	内 容
A	小・中学校及び高等学校の学習指導要領に準ずる教育課程または下学年・下学部に替えた教育課程
B	特別支援学校学習指導要領の各教科の内容を取り扱う教育課程
C	自立活動の内容を主に取り扱う教育課程

上記の3つの教育課程を編成している学校は、視覚障害特別支援学校、聴覚障害特別支援学校、病弱特別支援学校、肢体不自由特別支援学校を含め、平成30年度現在、特別支援学校41校の中で14校であった。その他27校においては、小・中学校及び高等学校の学習指導要領に準ずる教育課程はなく、特別支援学校学習指導要領の内容で教育課程が編成されている。単一や重複など障害の程度に応じて、国語や算数・数学などを教科別に指導をしたり、日常生活の指導や生活単元学習など、各教科等を合わせた形態で指導していたりする。

表1 知的障害特別支援学校の教育課程（例）

教科別の指導					合わせた指導			特別の教科 道徳	総合的な学習の時間	特別活動	自立活動
国語	算数 (数学)	音楽	図画 工作 (美術)	体育 (保健体育)	日常生活 の指導	生活 単元学習	作業 学習				

表1は知的障害特別支援学校の教育課程の例である。

特別支援学校では教育的ニーズに応じたきめ細かな指導を行っている。各教科等の指導内容を検討

する際は、小・中学校学習指導要領に示された内容を学ぶ教育課程、また、特別支援学校学習指導要領の各教科の内容を学ぶ教育課程で学ぶ子供が混在しているケースを踏まえ、教育課程の編成に十分注意することが必要である。

イ 個別の指導計画作成

各校では、児童生徒一人一人の障害の状態や特性等を踏まえた実態把握に基づき、個別の指導計画を作成している。個別の指導計画作成のための参考資料として、多くの学校が、健康状態や身体の状態（姿勢保持や移動等）、コミュ

ニケーション手段等自立活動6区分の視点で整理された独自のプロフィール資料を作成している。また、個別の指導計画を作成するために、前担任からの引き継ぎの後、4月から5月にかけて複数の教員で話し合いの時間を設定している。

しかしながら、研究協力員会議での情報交換からは、以下のような様々な課題が挙げられた。

- ・児童生徒の実態把握があいまいになり、どのような目標を設定すればよいか分からない。
- ・卒業までに身に付けて欲しい力が明確ではない。
- ・児童生徒が新特別支援学校学習指導要領に示されているどの段階を学ぶことを目標とするのか悩むことがある。
- ・生活単元学習の内容が、毎年同じようなものになってしまう。
- ・作業学習の内容が、どの教科等を合わせて指導しているのか意識化されていない。
- ・自立活動の目標をどのように設定するべきなのか不明なところがある。
- ・自立活動の指導では、保護者に対して、「今、何のためにその指導を行っているのか」という内容を端的に説明することが難しい。

個別の指導計画の作成は、カリキュラム・マネジメントの三つの側面の中に示された「教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること」の「子供たちの姿」を表す重要な資料となることから、上記に示した様々な課題を改善することが、今求められている。

これらの現状から、各教科等を学ぶ本質的意義を捉え直すことができる、また自立活動の視点で目標設定ができるシートの必要性を感じ、目標設定シート（仮称）の検討及び開発することにした。

(3) 目標設定シート（仮称）の検討及び開発

第3回調査研究協力員会議では、事例対象児を挙げ、2種類の目標設定シート（仮称）について検討を行った。多くの協力員は、児童生徒の実態を自立活動の視点で整理し、具体的な指導内容を設定するフローシートについては、特に戸惑いなく進めることができた。しかし、セレクトシートについてはいくつか課題が出された。経験の浅い教員であっても主体的に取り組むことができるような目標設定シート（仮称）の開発に向け、協議を進めた。各シートについては以下に示す。

ア セレクトシート（図2）

各教科の教育内容は、児童生徒の発達の段階等に即して選定されたものが配列されており、それらを順に実施することになっている。指導の際には、新小・中学校学習指導要領の各教科に示されている目標に照らし、児童生徒の学習状況が何学年相応かを把握する必要がある。この本シートを用いることにより、当該学年が適しているか、または下学年の内容が適しているか、新特別支援学校学習指導要領に示された目標及び内容が適しているかを、新学習指導要領を

基に把握することができる。

実際には、下学年や下学部の内容が適している事例対象児の場合には、何学年下なのかを選択することになる。この選択については、新学習指導要領を参考に目標及び内容を確認し、入力することができた。しかしながら、知的障害のある事例対象児の場合、新特別支援学校学習指導要領を参考にして、何段階なのかを選択する際、それぞれの段階がどのような目標や内容を設定しているのか選択することに時間がかかったり、選択した段階で合っているのかを不安に感じたりする研究協力員もいた。このことから、目標設定シート（仮称）を作成する際のヒントになるように、小・中学部の各段階に沿って各教科等の目標及び内容の一覧を示す必要性を感じた。検討した点を以下に示す。

特別支援学校小学部 6年児童の例		B・C課程で学ぶ児童生徒は、それぞれの教科について、1～3段階の中でどの学びが適当かを選択				
教科等	内 容	特別支援学校の 内容 段階 小学部			小学校 学年	
		1	2	3	1	2
生活 (特別支援学校)	ア 基本的生活習慣		●		特別支援学校の「生活」と小学校の「生活」は内容が異なる。小学部の「生活」には中学部の「理科」「社会」「職業・家庭」につながる内容も取り扱う。	
	イ 安全		●			
	ウ 日課・予定		●			
	エ 遊び		●			
	オ 人との関わり			●		
	カ 役割			●		
	キ 手伝い・仕事		●			
	ク 金銭の扱い		●			
	ケ きまり			●		
	コ 社会の仕組みと公共施設		●			
	サ 生命・自然		●			
	シ 物の仕組みと働き		●			
国語 ※ (特)2段階 同観点	知識及び技能		●		A課程の児童生徒は、当該学年の学びが適当か、下学年の学びであれば、何学年下の学びが適当かを選択することができる。	
	A 話すこと・聞くこと		●			
	B 書くこと					
	C 読むこと					
社会	※ 小学校3～6年(3～5項目)					
算数 ※ (特)2・3段階 同観点	A 数と計算					
	B 図形					
	C 測定					

図2 セレクトシート

本シートを用いることにより、児童生徒一人一人が各教科において、どの学年、どの段階で学ぶことが適当かを把握することができる。

知的障害のある子の教育課程には、生活を基盤として学習や生活の流れに即して学んでいくことが効果的であることから、日常生活の指導や生活単元学習、作業学習等の学習形態で指導を行っている。本シートを活用することで、日常生活の指導で重点を置く指導内容や、生活単元学習の各单元の中で、各教科のどの内容について重点を置き指導を行っていくかを確認することができる。本シートに入力する際、経験の浅い教員も取り組みやすいように、各段階の構成や各教科等の目標及び内容等について選択できるような一覧を新たに加え、い

くつかのヒントを提示することが必要であるとする。

イ フローシート（図3）

本シートは、新特別支援学校学習指導要領解説「自立活動編」28ページに示された「流れ図」を参考に検討した。具体的には、子供たちの将来の姿をイメージしながら、今年度重点的に指導する内容を設定するため、（A）「3年後に目指す姿」の項目を設けた。また、（B）新学習指導要領での改善事項である一人一人に応じた指導の充実として自立活動の内容が27項目となったことから、各項目をシートに明記した。さらに、（C）具体的な指導内容にとどまらず、どの場面で重点的に指導するのかを明記できる項目を入れると良いのではないかという意見があり、指導場面の項目を追加した。

発達の状態、発達や経験の程度、興味・関心、生活や学習環境などに
収集した情報を自立活動の区分に即して整理

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握
	・前向きで活動的であるが、少しできない自分を責めるような発言が見られる。 ・穏やかに話しかけると興奮することが少ない。	・他者のために役に立ちたい、他者と関わりたいという気持ちは強い。 ・落ち着いていれば相手の心情を理解できるが、その前に行動してしまう。	・聞くより理解したい。

障害の状態、発達や経験の程度、興味関心、長所や良さ等を学習上又は生活上の困難や、学習の履歴を中心に収集する。収集した情報を、自立活動の6区分に即して整理する。

いくつかの指導目標の中で優先する目標として

3年後にめざす姿	通級による指導の場において、成功体験を実感することのできる学習環境の中で、衝動的な言動をコントロールし、望ましいコミュニケーションや円滑な集団参加ができる。
長期目標（年間）	成功体験を実感することのできる学習環境の中で、衝動的な言動をコントロールしながら、自分の興味・関心を優先してしまう傾向があることを理解し、できるだけ、友達との望ましいコミュニケーションがとれるようにする。

（A）実態把握で整理した内容を基に、3年後にめざす姿を示す。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き
①生活のリズムや生活習慣の形成	①情緒の安定	①他者とのかかわりの基礎	①保有する感覚の活用	①姿勢と運動・動作の基本技能
②病気の状態の理解と生活管理	②状況の理解と変化への対応	②他者の意図や感情の理解	②環境の理解と活用	②動作の活用
③身体各部の状態の理解と養護	③障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲	③自己の理解と行動の調整	③必要な道具の活用	③言語の形成と活用
④障害の特性の理解と生活環境の調整		④集団への参加の基礎	④認知や行動の手掛かりとなる概念の形成	④コミュニケーション手段の選択と活用
⑤健康状態の維持・改善			⑤作業に必要な動作と円滑な遂行	⑤状況に応じたコミュニケーション

（B）選定した項目をクリックすると色が変わる。

選定された項目に関連付け具体的な指導内容を設定

具体的指導内容	ア 小集団において、ルールを守ることや負けた時の対応方法などを身に付けるため、簡単なルールのあるゲーム等に取り組む。	イ 学校の中で起こる様々な場面をビデオや絵で見て、その場面を、登場人物の気持ちを考えながら演じたり、ビデオ撮影等で自分の言動を客観的に見たりしながら、適切な行動を、その理由と共に話し合う中で理解する。	ウ 気持ちを自分で適切に表現する。
---------	--	--	-------------------

（C）年間指導計画を参考にしながら、指導場面を選定す

指導場面（各教科・単元名）	教科	単元名	教科	単元名	教科	単元名
体育	バレーボール型ゲーム	道徳	転校生がやってきた	体育	からだぼぐし	
国語	意見こうかん会をしよう	学活	休み時間の過ごし方			

※ 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚園・小学部・中学部)より抜粋及び参照。(P. 160～163)

図3 フローシート

7 今後に向けて

今年度は、講師から、「特別支援学校におけるカリキュラム・マネジメントの実現のために、今、何を行っていく必要があるのか」という研究の具体的な方向性について指導助言を受けた。また、障害種の異なる特別支援学校から経験豊富な教員を調査研究協力員として招聘し、4回の調査研究協力員会議を実施する中で、特別支援学校の現状について情報を共有した。

カリキュラム・マネジメントの実現のために、本研究では、個別の指導計画を作成し、より活用できる仕組みについて研究を進めてきた。個別の指導計画を作成するためには、児童生徒の前年度までの学びの履歴を把握した上で、各教科等並びに自立活動で実態を捉え、目標設定を行っていく必要がある。そのことから、各教科等や自立活動で目標設定できるシートについて検討及び開発を行った。調査研究協力員と共に、事例対象児を挙げて各シートに記入作業を行うことで、シートの見直しを行うことができた。

次年度は、図4に示したように、研究協力員所属校での授業実践を行う。実際に今年度検討及び開発した2種類の目標設定シート（仮称）を用いて、障害に起因する学習上や生活上の困難さの状態を知り、具体的な指導や支援がで

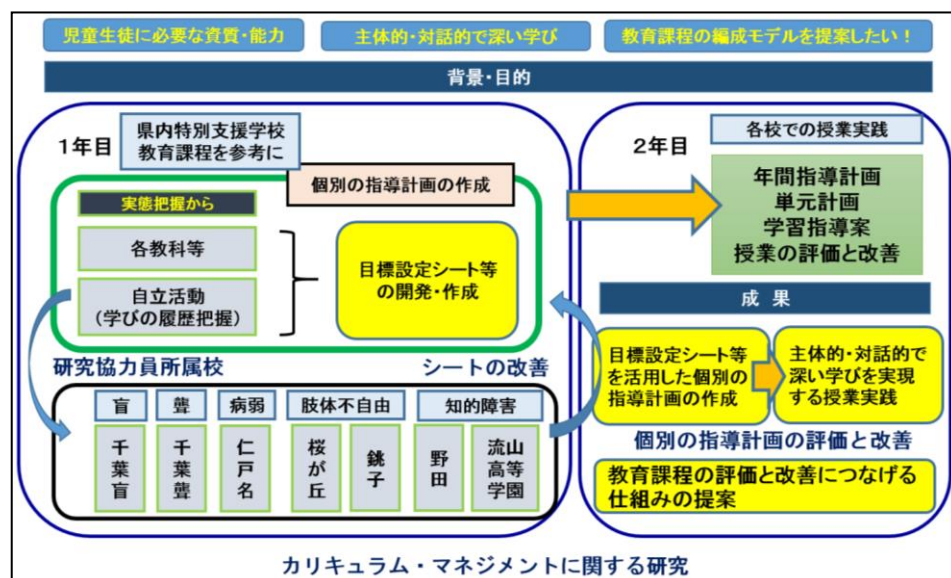


図4 本研究の全体イメージ図

きるような目標が設定できると考える。児童生徒一人一人の目標が具体的にすることで、それぞれの授業（単元）のねらいについても明確になる。その授業で何を学ぶか、何ができるようになるかが明確に示されるような学習指導案の在り方についても検討していきたい。

さらに、授業実践を基に、教育課程を評価・改善し、次年度の教育課程の見直しにつなげる仕組みについても併せて検討していきたいと考える。